

2014年10月

イチゴやかき氷のお供としておなじみのれん乳に
待望の1回使いきりタイプ登場！

『森永ミルク ディスペンパック入り』

11月1日(土)より発売のお知らせ

森永乳業は、発売から90年以上の歴史を誇る加糖れん乳「森永ミルク」から、便利な1回使いきりタイプの加糖れん乳「森永ミルク ディスペンパック入り」を11月1日(土)より、全国にて新発売いたします。

れん乳の使用実態について調査した結果では、れん乳を買わなくなった理由として、使う機会がなくなったり、買って使い切れずに余らせてしまうというご意見がございました(森永乳業調べ、2013年12月、n=800)。そこで、ちょっとれん乳を使いたいときにもぴったりの、少容量で、1回で使いきり出来る「森永ミルク ディスペンパック入り」を発売いたします。これからシーズンを迎えるイチゴはもちろん、パンに塗る、コーヒーなどの飲料に入れるなどいつもと違う使用方法もお楽しみください。

※ディスペンパックとは…容器を2つに折ると中身を押し出すことができる容器のことです。

1. 商品特長

- ① 1回使いきりのれん乳です。使いたいときにいつでも開けたての味わいをお楽しみいただけます。(いちご小10粒程度、食パン1枚分)
- ② 容器を折って押し出す形状で、手を汚さずに簡単にご使用いただけます。
- ③ お弁当のフルーツ用やアウトドアにも手軽に携帯できます。



2. 商品概要

①商品名	森永ミルク ディスペンパック入り
②種類別	加糖れん乳
③包装形態	ディスペンパック、アルミ蒸着ピロー袋
④内容量	15g
⑤カロリー	49kcal
⑥保存方法	常温
⑦賞味期限	9ヶ月
⑧主要ターゲット	単身世帯、少人数家族
⑨主要売場	量販店、一般小売店
⑩希望小売価格	60円(税別)
⑪発売日・地区	11月1日(土)・全国
※JANコード	4902720 110969

<参考>

■「森永ミルク」について

加糖れん乳「森永ミルク」は1919年に金属缶タイプで発売されました。1986年にはより使いやすいチューブ入りの「森永ミルク(チューブ入り)」も登場。現在「森永ミルク」は、市場の約60%を占めるれん乳の定番商品です(数量ベース・金額ベース、2014年9月時点、森永乳業調べ)。

近年は、イチゴ・キウイ・バナナ等のフルーツに加えるだけでなく、かき氷にかけたり、コーヒーに入れたり、パンに塗ったりなどさまざまな使用方法をご提案し、お楽しみいただいております。



練乳の歴史

1. 練乳の起源は飛鳥時代

日本に牛乳が伝えられたのは飛鳥時代と言われています。牛乳は腐りやすいので、牛乳をそのままではなく、加熱処理をした「蘇(そ)」が天皇に献上されたと平安初期の記録に残っています。この「蘇(そ)」こそが練乳であったと言われています。



2. 練乳が広まったのは明治時代

練乳が日本で商品として作られるようになったのは明治時代のはじめから。練乳は牛乳よりも保存しやすく、貯蔵にも便利であったことから、赤ちゃんや子どものための人工栄養ミルクとして使われていました。



3. 練乳をつくる会社としてスタート

森永製菓より発売されていた「森永ミルクキャラメル」の原料である練乳をつくるために、大正6年、森永製菓の子会社として日本練乳が設立しました。この日本練乳が森永乳業の起源です。森永乳業は練乳の生産からスタートした会社なのです。



4. 大正時代「練乳森永ミルク」発売

1919年に、一般家庭用の練乳として「練乳森永ミルク」(加糖練乳)が発売されました。練乳は育児用の人工栄養ミルクとして広く使用されていましたが、砂糖が多く含まれています。そこで、育児用ミルクとして適した調製粉乳「森永ドライミルク」が1920年より発売されました。

■「ミルリン」について

この牛のキャラクターは、1956年に、当時の「森永ミルク 加糖れん乳」と「森永βドライミルク」（育児用の調製粉乳）の2つの商品に初めて採用されました。

当時はデザイナーがいなかった時代。このキャラクターは画家の方に描いていただいたものです。その後はさまざまな森永乳業の商品パッケージのシンボルとして活躍しています。

そして2012年8月20日、お客さまからの公募により、登場から56年目にしてついに“ミルリン”という名前が決定いたしました。ミルクをたくさん出してくれた牛さんで、首のベルがリンリンと鳴っているイメージからきた、かわいらしい名前です。



ミルリン

以上